

二〇二五年度（令和7年度）

# 横浜女学院中学校

## A 入学試験問題

令和7年2月1日（午前）

# 国

# 語

### 注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、18ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏名



— 次の文章の——線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違まちがいを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

新型かんせんしやうコロナウイルス感染症えいきやうの影響で、新たな環かんきやう境問題が生じた。その中の一つに、フラワールロスがある。

フラワールロスとは、まだ使用できるのにス①てられる生花のことだ。その理由の一つとして、経済活動が縮小し、成人式けっこんや結婚式などのイベントの数がゲ②ンショウしたことにより、花を使う機回や場所がなくなったことが挙げられる。ロスを改③善するため、国や地方自治体④、民間企業などで、様々な取り組みを行っている。もちろん、フラワールロスの改善には個人の努力も必要となってくる。今後は、消費者一人一人が積極的に花を買っていくことも必要だ。

二 次の記事を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

長崎県五島列島の中学校に通う三年生のサトルは、産休に入る音楽教師の代わりにやってきた柏木先生が顧問を受け持つ合唱部に興味を持つ。合唱部に入部したいことを両親に告げるが、家族がかかえている「ある事情」から反対されている。

布団に横たわって古い天井を見ながら僕はまよった。まだ今なら、入部をやめることができるはずだ。気が変わったと柏木先生に言えばいい。すこしはすかしいけど、それほど怒られないのではないか。合唱部のことをかんがえているうちに、鞆かぼんに入れっぱなしにしているCD-Rのことをおもいだした。布団から起き上がり、鞆をさぐると、それが出てくる。長谷川コトミから受け取ったものだった。

※ 『Nコン課題曲・手紙』。白い円盤えんぱんにマジックでそう書かれていた。

合唱部をやめるとしたら、聴くひつようはないけれど、ためにCDラジカセにセットしてみる。再生ボタンを押すと、スピーカーから歌声が流れだした。

今日の放課後、第二音楽室に行ってみると、大勢の合唱部員がいた。新旧の部員たちは顔なじみ同士であつまり雑談に立っていた。そんな僕をあわれんだのか、長谷川コトミがちがづいてくるなんてことは完全に想定していなかった。

「桑原くん、さぼらんやったね、よかったあ」

「あ、ど、どうも……」

長谷川コトミは周囲をながめる。

「おおかねえ。きゆうに人がふえたけんねえ。今日からもう練習するとやろか」

どのような返事をすればいいのかわからず、沈黙ちんもくがながくなる。和気藹々わきあいあいと周囲がにぎわっている。僕たちの間にある無言がよけいに際だった。何か発言しなくてはとあせった僕は、とにかく声に出してみる。

「えっと、その……」

「なん？」

「用事があって、今日はもう、帰らんばいけんけど、だいじょうぶかな……」

「用事って？」

① かまほこ工場まで、Xに行かなくてはならないのだ。

しかし、兄のことを、どのように説明したらいいだろう？

口ごもっていたら、長谷川コトミが先に口をひらいた。

「帰ってもだいじょうぶばい。先生には私から言っとくけん」

「うん、ごめん」

「よかよ」

Ⅱ がじんわりと温かくなるようなやさしい笑みだった。中学一年生のとき、寝たふりねをしている最中に聞いてしまっ

た彼女のひとりごとは、もしかしたら僕の聞きまちがいだったのかもしれない。

「そうだ、桑原くん、ちょっとまっとつて。そこにおつてね。うごかんでよ？」

長谷川コトミはそう言うと、第二音楽室の隅っこに置いていた自分の鞆のところに行つて、なにかを取り出してもどつてくる。

「はい、これ、持つていって」

彼女の手には、透明なうすいケースに入ったCD-Rがにぎられている。

白い円盤にマジックで『Nコン課題曲・手紙』と書いてあった。

「なん、これ？」

「私たちが練習する曲。練習に参加せんでも、くりかえし聴いとけばよかけん」

柏木先生のピアノに合わせて歌つたものを、録音して作つたCDなのだ説明をうける。

「これ、一枚しかなかと？ パソコンでコピーして、これは返したほうがよかよね？」

「桑原くん、そういうことできると？ パソコンにくわしい？」

「ふつうだとおもうけど……」

長谷川コトミが顔を寄せて言った。

「じゃあ、そのうち、パソコンのことで質問するかもしれん」

すこしうつむきかげんだつたせいか、彼女の目元は前髪まえがみにかくれて、表情がよく見えなかった。

「なんでも聞いて」と返事をして、腕時計を見ると、兄のおむかえに行かなくてはいけない時間だったから、いそいで第二音楽室を飛びだした。

夜が明けて、山の稜線が朝日にうかぶ。僕は布団を抜け出して、窓をあけた。

「よかよ、お母さんがむかえに行くけん」

台所で母が朝食の支度をしながら言った。ついさつき、まだ味噌汁をつくりはじめたばかりの母に僕は宣言したのだ。入部をとりけしたくない、ということ。

「一日おきじゃなくてもよか。毎日、行ってこんね。アキオのおくりむかえなら、ずーっとしよったことやもん。小学生のときにくらべたら、今のアキオは、おとなしかもんよ。いろんなことば学習したけんね、パニックであればだすことも、もうあんまりなくなつたし。サトルは好きにせんね」

② 僕は母の苦勞を<sup>②</sup>していた。兄が小学校に入学する前は、発達障害に関する知識が世間に浸透<sup>しんとう</sup>していなかった。兄がみんなとおなじことをできないのは、母のしつけがなっていないからだ、当時は存命だった祖母に責められたこともあったという。

「アキオに愛情ばそそがんやつたけん、あがんなつたち、ばあちゃんには言われたとよ。ひどかねえ。こがん、好きとにねえ」

母は本で自閉症のことをしらべて、それが生まれつきの脳の障害であることをしった。自分で学習プログラムを組み、60

兄にひとつずつ物事をおしえた。

「おむかえにいくのも、たのしみばい。お父さんは、私が説得しとくけん、サトルは部活に行かんね」

「よかと?」

「部活にでもはいらんば、あんた、友だちできんばい。あんたが結婚けっこんするとはもうあきらめとるけどね、友だちくらいはできんといかんばい」

③ なんだかいろいろとひどいけど、全体的には母の気持ちがつたわってきた。

「うん、ごめん」

「あんた、ごめんち言うとはやめんね。そういうときは、ありがとうち言うとよ」

「そうか、ありがとう」

洗面所で顔をあらってきた兄が、居間のテレビの前にすわる。朝の番組で流れる占うらないコーナーは、兄の心をつかんでなさない。母がお椀わんに味噌汁をよそいながら僕に聞いた。

「サトル、昨日はお父さんに言われて、ちよつと迷いよつたやろ? どうして急に、気が変わったと?」

「なんでかな。わからん」

僕はそうはぐらかす。

ほんとうは、昨晚、CD-Rに収録されていた歌を聴いて、僕は決めたのだ。

「なんでやろーね。わからんけど、僕は合唱部に入りたい。みんなで歌いたかつさ」

身支度みじたくを整えて、兄といっしょに家を出た。おむかえは母が引き受けたけれど、工場まで兄を送るのは僕の担当だ。兄の



姿がかまぼこ工場に消えるのを見届けて、自転車にまたがり、学校にむかつてペダルをこいだ。

教室に入って自分の席につくと、となりの席の三田村リクから話しかけられた。巨漢きよかんの彼が僕のいるほうにむかつて体をかたむけると、山がのしかかってくるような威圧感いあつかんがあった。

「桑原、おまえも合唱部に入ったとやる？ 昨日、途中で帰ったよな？」

「あ、うん……」

緊張きんちょうしながら返事をする。最後まで第二音楽室にいなかったことを責められて、さつそくいじめにあうのだなと絶望する。さきほど母に入部の決意を語ったばかりなのに、はやくも退部の文字がⅢにちらついた。三田村リクは、鞆たもから四百字詰めよんひゃくじぶの原稿用紙げんこう数枚を取り出して僕の机に置いた。

「合唱部全員に宿題が出たっさ。十五年後の自分あてに手紙ば書けて。おまえ、途中で帰ったけん、原稿用紙はもらつたらんやろ？ 俺がもらつとったけん。ちなみに、提出はせんでよからしいぞ」

説明をうけながら原稿用紙を見つめる。それから、はっと気づいて、彼かれを見る。

④ 「あ、ありがとう！」

僕がそう言うと、三田村リクは「よかよか」と手をふった。

(中田永一『くちびるに歌を』より)

※『Nコン課題曲・手紙』…NHKと全日本音楽教育研究会が主催する合唱コンクールのこと。通称はNコン。「手紙」は、2008年度の課題曲。

問一 I (11行目) に入る適当な言葉を、漢字1字で答えなさい。

問二 II (29行目)、III (84行目) に入る適当な言葉を、次からそれぞれ1つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 足      イ 頭      ウ 手      エ 鼻      オ 胸      カ 腹      キ 目

問三 —— 線① 「かまぼこ工場まで、Xに行かなくてはならないのだ」(23行目) とありますが、Xに入る言葉を本文中から6字でぬき出し答えなさい。

問四 —— 線② 「僕は母の苦勞をしっていた」(55行目) とありますが、母はアキオと向き合うためにどのような苦勞をしたのか。70字以内で答えなさい。

問五 —— 線③「なんだかいろいろとひどいけど、全体的には母の気持ちがつたわってきた」（66行目）とありますが、こ

のか所の説明として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 母は、聞こえが悪いことを言っているが、自分の意志で部活を頑張りたいと言いつ出したサトルを応援し、送り出してあげようとしている。

イ 母は、自分の代わりに兄の面倒を見ながらも、部活でしか居場所のないサトルをかわいそうに思い、わがままを聞いてあげようとしている。

ウ 母は、サトルの内気な性格では、部活にもきつとなじめないのだろうと落胆しつつも笑い話に変えてなくさめようとしている。

エ 母は、表向きはサトルの入部に賛成しているが、兄のおむかえに行つてほしいと願っていることが、とげのある言葉に表れている。

オ 母は、サトルが長谷川コトミに恋をしていることを察して、サトルの入部を仕方なく認め、嫌味を言いながらも、活動を見守ろうとしている。

問六 本文中のA部分（72行目～80行目）から、表現技法が使われているか所を16字でぬき出し、最初の5字を答えなさい。

問七 ——線④「あ、ありがとう！」(89行目)とありますが、このときのサトルの気持ちとして、最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 入部早々にして、学校内で有名ないじめっ子のリクに急に親切にされ、驚きおどろをかくせないでいる。

イ 話したことの無いリクに急に話しかけられ、いじめられるのではないかと身構えている。

ウ 退部しようと思っていたが、部員に親切にされて、もう一度合唱をやりたいと思っている。

エ いじめにあうことを覚悟かくこしていたが、合唱部の一員として認識してくれてうれしく思っている。

オ リクから原稿用紙を渡され、部員とともに手紙を書くことができるので、喜びを感じている。

問八 この文章は出来事が起こった順番通りに書かれていません。起こった順番通りに書かれている説明として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア サトルは、家で鞆に入れっぱなしにしているCD-Rのことを思い出した次の日、用事があって部活を早退した。

イ サトルは、用事があって部活を早退した日、第二音楽室で長谷川コトミのひとりごとを聞いてしまった。

ウ サトルは、母から入部の許しを得たが、入部しようと思ったのは、一週間前にCD-Rに収録されている歌を聴いたときだった。

エ サトルは、リクから原稿用紙をもらった日の放課後、部活に参加し、課題曲である『手紙』を歌った。

オ サトルは、兄のおむかえのために部活を早退した次の日に、リクから合唱部の宿題である原稿用紙を受け取った。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

私たちにとって「国語」は、すなわち、日本語を指すのが当たり前だ。学校の授業で「国語」といえば、日本語を勉強する科目を指す。しかし、考えてみると「国語」はどの国の言語にも当てはまる。だから、外国の人に「国語とは日本語のことだ」と言うと、ちよつと、笑われてしまう。必ず、「私の国でも、国のことは国語です」と言われてしまうのだ。

「国語」という概念は意外に新しく、明治時代に上田万年うへだ かずとしという学者によって提唱された。

(中略)

「標準語」とは、この「国語」を具体的にした概念だ。話しことばにもとづいた「国語」を考える場合、どの話しことばを基準にするかが問題になった。ほとんどの学者や政治家、文学者は、「東京語」を基準にするべきだと考えた。上田も、明治二八(一八九五)年の「標準語に就きて」という論文で、「教育ある東京人の話すことば」を標準語にするべきだと主張した。

実は、「教育ある東京人の話すことば」の「東京人」は男性であることが当然視されていた。国語学者の岡野久胤おかの ひさたねは、明治三五(一九〇二)年の「標準語に就いて」という論文で、標準語は「中流社会の男子のことば」だと書いている。

「教育ある」や「中流社会」によって「国語」から排除されたのは、「べらんめえ言葉」と呼ばれた、東京の下町や職人のことばだ。「男子のことば」によって排除されたのは、女性が使う言葉づかいだ。そして、「東京人」によって排除されたのが、東京以外で使われていた言葉づかいである。「標準語」の選択には、すでに、社会階級※<sup>2</sup>、ジェンダー、地域の区別※<sup>2</sup>が含

まれていた。そして、この区別は、「標準語」を〈教育ある東京男子〉というアイデンティティに結び付け、<sup>※3</sup>「それ以外の言葉づかい」を〈教育のない非東京人や女性〉と結び付けた。

なんてことはない。<sup>①</sup>学者や政治家、文学者といった、「何が標準語か」を決めることのできる人たちが、自分たちが使っている話しことばを「標準」にしたのだ。

本書では、このように「標準語が正しい国語である」という考え方を、「標準語イデオロギー<sup>※4</sup>」と呼ぶ。標準語イデオロギーは、「教育ある東京男子」が、自分たちが使っていることばを基準にすることで、自分たちの話し方を変えずに正しい国語<sup>20</sup>の話し手になるという特権を得た言語イデオロギーだ。

東京語に高い価値が与えられると、東京以外の地域のことばは、国語の成立をじゃまする「方言」とみなされるようになった。みんなで「ひとつの国語」を話そうとしている時に、そうでない「方言」を使うべきではない。明治時代以降の「方言」とは、「国語＝標準語」の成立をさまたげる言葉づかいとして、最初から否定的な概念として誕生したのだ。

「標準語」と「方言」には、区別だけでなく優劣<sup>ゆうれつ</sup>がともなっていた。それは、区別というものが、差別するための区別である場合が多いからだ。日本全国に混在していた地域語の中で、「東京語」と「非東京語」の間に境界線を引き、「優れた標準語」に対して「劣<sup>おと</sup>った方言」を差別する。

<sup>②</sup>「方言」誕生の経緯<sup>けいゐ</sup>は、ある言葉づかいが権威<sup>けんゐ</sup>を獲得するためには、他の言葉づかいを否定することが、ひとつの有効な方法であることを示している。「教育ある東京男子の良いことばから標準語ができました」と言うだけでなく、「実は、東京以

外のことは、教育のない人が使う劣ったことばだったのです」と言う必要があったのだ。

けれども、「教育ある東京人」も、いろいろな話しことばを使っていた。なぜならば、当時東京で勉強していた人の多くは、東京以外の地域から上京して来た人たちだったからだ。

そのため、「X」の創成を考えていた人たちは、標準語は自分たちが「Y」しなければならぬと考えた。東京で話されていることばがあまりにも多様だったので、人々の努力で自然に標準語が成立するのは不可能だと思ったのだ。

上田万年も、明治三三（一九〇〇）年に書いた「内地雑居後に於ける語学問題」という論文で、一日も早く東京語を標準語、すなわち、国語に決めて、標準語の文法書や辞書を出し、それを全国の小学校で使わせなくてはならないと主張している。

さっそく、同年の小学校令改正で「国語科」という科目が設けられ、明治三七（一九〇四）年の第一期国定教科書『尋常じんじょう小学読本』、今でいう、小学校の国語の教科書では、東京の中流社会で使われている話しことばを国語として教えることが明言された。

そのため、学校現場では、「標準語」を話すことは正しいことであるが、「方言」を話すことは間違っているという認識が芽生えた。その結果、学校で地域のことばを使った子どもをあからさまに罰する制度まで登場した。

たとえば沖縄では、明治四〇（一九〇七）年ごろから、学校で方言を話すたびに「方言札」を渡し、木札の数によって素行点が引かれた。勉強よりも素行による落第者が続出して、恐怖の毎日だったという（外間一九八一）。

③ 方言の否定は方言の話し手に理不尽な差別をもたらした。著名な作家たちも、その時の思いを述べている。

一九二〇年代に青森から上京した石坂洋次郎は、「標準語が自由にしゃべれないために、ずいぶん卑屈ひくつな思いをさせられた」。一九五〇年代に上京した井上ひさしは、「上京してから一年ぐらいの間、軽度の吃音症きつおんしょうにかかった」。立松和平が、栃木なまりが恥ずかしくて「ライス」を注文できなかったのは一九六〇年代である（熊谷二〇一一）

昔の人たちがこのような経験をしたことを知って、若い読者の中には驚く方おどろもいるだろう。現在では、方言にもつとプ④ラスのイメージを持つ人が多い。「方言萌え」や「方言アイドル」だけでなく、後で取り上げている、若者が自分の出身地ではない地域の方言を使う「方言コスプレ」もある（田中二〇一一）。I、京都出身ではない話し手が、「きれいどすえ」50などと言う場合だ。

方言の評価が上がった理由はいろいろ挙げられる。II、ひとつだけはっきりしているのは、方言が変化して標準語に近づいたから、方言の価値が上がったのではないということだ。つまり、「方言」という言葉づかいが実際にどのようなものであるかに関係なく、方言に対する価値が下がったり上がったりした。「方言は恥ずかしい」とか「方言はカッコイイ」などの、「方言」という言葉づかいに対する「言語イデオロギー」は、その言葉づかい自体の特徴とくちょうに関わりなく作られるのだ。55「言語イデオロギー」は「話し方について語ることば」によってつくられることを確認した。方言に対する言語イデオロギーを作り出したのは、人々の「方言について語ることば」だ。つまり、方言に対する評価が変わったのは、これらの「方言について語ることば」が変わったからだ。

なぜ、変わったのか。ひとつには、時代によって求められているものが変わったからだろう。「方言は恥ずかしい」とい



う評価が優勢だった一九六〇年代までは、標準語の成立が急務だったために、方言を否定する発言が多かった。それ以降は、標準語が普及したために、こんどは多様な言葉づかいを求めて、方言を再評価する発言が増えたのかもしれない。言葉づかいに対する評価は、各々の時代に求められているものによって変化するのだ。

(中村桃子『自分らしさ』と日本語』より)

※1 概念：言葉であらわされる大まかな意味内容。

※2 ジェンダー：男らしさ、女らしさといった、社会的・文化的につくられた性差(男女の性別による違い)。

※3 アイデンティティ：一人の人間の個性。また、自分がそのような独自性を持った、ほかならぬ自分であるという

確信。自己同一性。

※4 イデオロギー：①歴史的・社会的に全体として規定された考え方の型。

②政治、社会に関する基本的な考え。思想傾向。

※本文は①の意味。

※5 卑屈：必要以上に自分をいやしめること。

※6 吃音症：音声がかもる病気。

問一

I

(52行目)・

II

(57行目)

に当てはまる語句を次からそれぞれ1つずつ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば

イ ところで

ウ また

エ しかし

オ もし

問二 〓 線「価値」(22行目)と同じ熟語の構成となっているものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 難易      イ 広告      ウ 移動      エ 骨折      オ 無人

問三 〓 線①「学者や政治家、文学者といった、『何が標準語か』を決めることのできる人たち」(17行目)とありますが、この部分を言いかえた言葉を本文中からさがし、8字でぬき出し答えなさい。

問四 〓 線②「『方言』誕生の経緯」(28行目)とありますが、標準語に対して方言はどのような言葉づかいとして生まれたのか。その答えとなる1文を本文中からぬき出し、最初の5字を答えなさい。

問五  X (33行目)・ Y (33行目) に当てはまる言葉として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- |   |                            |    |                            |                  |
|---|----------------------------|----|----------------------------|------------------|
| ア | <input type="checkbox"/> X | 方言 | <input type="checkbox"/> Y | 廃止 <sup>はい</sup> |
| イ | <input type="checkbox"/> X | 国語 | <input type="checkbox"/> Y | 廃止               |
| ウ | <input type="checkbox"/> X | 方言 | <input type="checkbox"/> Y | 制定               |
| エ | <input type="checkbox"/> X | 国語 | <input type="checkbox"/> Y | 制定               |
| オ | <input type="checkbox"/> X | 言葉 | <input type="checkbox"/> Y | 分別               |

問六 —— 線③ 「方言の否定は方言の話し手に理不尽な差別をもたらした」(44行目)とありますが、これの例として、**適切でない**ものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 沖縄では勉強ができて方言のせいで落第させられることがあった。

イ 国定教科書『尋常小学校読本』を使用しない小学校は罰を受けていた。

ウ 石坂洋次郎は、なまりのない言葉が話せず、肩身のせまい思いをしていた。

エ 井上ひさしは自身の方言を恥じて、軽度の吃音症にかかっていた。

オ 立松和平は方言を使用することをためらい、日常生活に支障をきたした。

問七 —— 線④ 「現在では、方言にもっとプラスのイメージを持つ人が多い」(48～49行目)とありますが、マイナスだった方言のイメージがプラスになったのはなぜか。その理由を述べているか所を20字でぬき出し、最初の5字を答えなさい。

問八 本文の内容を説明したものとして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 1960年代の日本では、方言を話すと罰せられる地域があった。

イ 東京以外の地域から上京してきた人たちは、方言しか話せなかった。

ウ 「国語」と「標準語」は「東京語」を基準につくられた。

エ 近年の方言は標準語に近づき、価値が上がってきている。

オ 多様な言葉づかいは、現在でもその評価は低いままである。

問九 方言のように、一定の言葉づかいの評価が時代とともに変化することに対して、身近な例を挙げながら、あなたの考えを100字で書きなさい。ただし、例は方言以外にすること。







